

YAMANASHI
DISCOVERY
MAGAZINE

VOL.

13

2018

WINTER

山
梨

てて

teku-teku

くく

| 特集 |

ジャン＝フランソワ・ミレーの
名画の世界を愛でに



山梨

てて Teku-Teku くく



『山梨てくてく』は
歩く速さでじっくりと

山梨の魅力を紹介していきます。

フランス・バルビゾン派の絵画に

山梨の豊かな自然・風土のイメージを重ね、

名画で新たな文化を開いた山梨県立美術館。

「ミレーの美術館」として親しまれ、

開館40周年を迎えたこれまでの足跡と、

芸術に触れながら『てくてく』。

こんな山梨があったんだ、と思える発見や感動を

見つけていただけたと思います。

VOL. 13

CONTENTS

特集 |

ジャン＝フランソワ・ ミレーの 名画の世界を愛でに

03

ミレーの 美術館を楽しむ

04

ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯。

08

山梨県立美術館とミレー。

12

「てくてく」食」

ミレーの故郷でも親しまれてきた
フランスの郷土料理「ガレット」を広めたい。

14

「てくてく」住」

農業と自然の尊さを
絵画で伝える

16

「てくてく」甲斐の図」

竜王駅

ミレーの

「種をまく世界がひらく」山梨県立美術館

美術館を楽しむ

1978(昭和53)年の開館から40年。

山梨に芸術の種をまき、

新しい文化の扉を開けた山梨県立美術館は、

今や70点ものミレー作品を所蔵する

世界に誇る美術館となった。

芸術の森公園の中、

四季折々の美しい自然に彩られた品格ある佇まい。たまたま

ようこそ、ミレーと出会える美術館へ。



ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯。

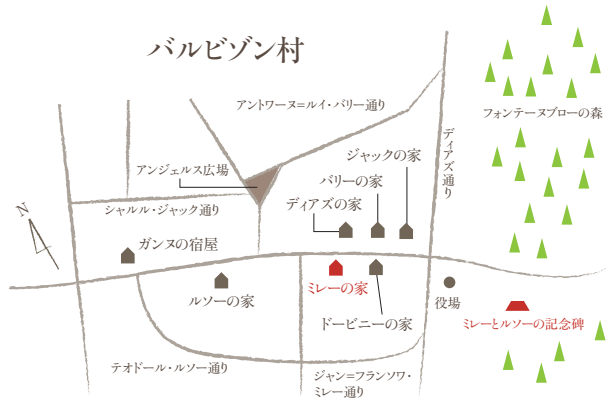
みずみずしい感性と温かいまなざしで、
人間を、そして自然を描いた画家ジャン＝フランソワ・ミレー。
絵の前に佇むと、静かな気持ちで自分の内面と向き合えます。
ミレーの生涯、そしてミレーの作品の魅力を
山梨県立美術館の小坂井玲学芸員が語ります。

フランス・ノルマンディーより
始まるミレーの原点。

ジャン＝フランソワ・ミレーは、1814年にフランス北西部ノルマンディー地方の村・グリュシーで農家の長男として生まれました。土地を持ち、古くから続く農家で、親戚には聖職者もいたことなどから、幼少期には古典的な物語や宗教に関する知識を身に付けていったようです。

小さい頃から絵を描くのが得意だったミレーは、18歳になるとグリュシーの近くにあるシエルブルルに出て絵画を学び、1837年にはパリに出て国立の美術学校で指導を受けることになりました。当時の美術教育では、神話や宗教を主題とした歴史画が高貴なものとされ、これらを描くことが基本であったため、ミレーもそれにならって学び始めました。

当時、画家の登竜門であったローマ賞の獲得も一つの目標でした。受賞者は国費で絵画の本場・ローマに留学することができたため、賞を獲得することは画家としての成功への近道でした。



バルビゾン村で制作していた代表的な画家たちを「バルビゾン派」と呼んでいた。彼らはフォンテーヌブローの森を愛し、森の豊かな自然を画題としていた。



1845

「ダフニスとクロエ」 油彩・麻布 / 82・5 × 65・0 cm
ミレーが物語を主題にして制作した作品。古代ギリシアの詩人ロンゴスの牧歌的な恋愛小説「ダフニスとクロエ」の一場面が描かれている。



1841-42

「ポーリーヌ・V・オノの肖像」 油彩・麻布 / 73・0 × 63・0 cm
ミレー初期の肖像画。描かれているのはシェルブールの仕立屋の娘、ポーリーヌ・ヴィルジニオス。ミレーの最初の妻となった女性だが結婚3年後に他界。



ミレーもこのコンクールに挑みますが落選。しかし1840年に、官展であるパリのサロンで肖像画が初入選を果たします。

サロンで入選という成功を手にしたミレーはシェルブールに戻り、依頼を受けて肖像画を制作したり、親しみやすい風俗画などを描いたりして生計を立てるようになります。1841年、ポーリーヌと結婚し、妻ポーリーヌを親密な視点で捉えた、魅力的な肖像画《ポーリーヌ・V・オノの肖像》を描き上げました。ポーリーヌと二人でパリに戻ったミレーの生活は、収入が少なく苦しかったのですが、過去の巨匠の作品を見てまわり、学ぶことができました。そのような暮らしの中、体が弱かったポーリーヌが1844年に亡くなり、ミレーは再びシェルブールに戻ったのです。

バルビゾンへ、そして農民を描く。

ポーリーヌを亡くしたミレーは生涯の伴侶となるカトリーヌ・ルメールと出会い、1845年にパリに戻ります。以降、神話画や宗教画をサロンに出品し入選を果たします。しかしながら、批評家たちの注目を大きく集めるには至りませんでした。

1848年、フランスは3度目の大きな革命期を迎えます。世情と文化が複雑に絡み合っているフランスでは、美術の世界も変わり、作品も一般大衆や農民を描いたものが目立つてきました。そしてミレー自身も自分が親しんできた文化圏の農民の生活や労働をレパートリーとして表現する

1853



「落ち穂拾い、夏」油彩・麻布／38.3×29.3cm

ミレーは生涯に3度、四季連作を制作しており、本作は最初の連作の「夏」にあたる。落ち穂を拾う貧しい農民の姿を主題としている。豊かな収穫の季節を表した作品。

1853-56



「鶏に餌をやる女」油彩・板／73.0×53.5cm

戸口で鶏に餌をやる女性とそこに集まる鶏。鶏もそれぞれの個性が描かれている。欄の向こうでは男性が働く姿もあり、農家の夫婦の日常生活が描かれた作品。

1850

Teku-Teku
FEATURE



「種をまく人」油彩・麻布／99.7×80.0cm

威厳に満ちた農民の姿を描いた本作はサロン出品の際にも賛否を巻き起こした。ほぼ同じ構図の作品がボストン美術館に所蔵されているが、同じ主題を繰り返し描くというのも、ミレーという画家を考える時に重要な要素である。

ようになり、サロンで入選を果たすのです。ミレーが農民画を描くようになったのは、社会にとって必要な表現であると感じたからだと思います。

1849年パリでコレラが流行し始めたため、ミレーは家族と共にバルビゾン村に移住しました。バルビゾン村は、パリ近郊にあるフォンテーヌブローの森の外れにあり、風景画家ルソーらの制作の拠点でした。ミレーは、ここで山梨県立美術館で所蔵する《種をまく人》を描きました。この作品は、移住後初のサロン出品作であること、また、農民画に専念していくミレーの初期の作品であり、ミレーの代表作といえるものです。一農民がこのような威厳にあふれた姿で描かれたことは、当時の慣習から逸脱する表現として非難されることもありましたが、新しい社会の主役である民衆を象徴する作品として、高く評価する文筆家や批評家もいました。

また、当館には1853年に制作された《落ち穂拾い、夏》も収蔵されています。「落ち穂拾い」は、収穫を終えた大地に穂を残し、貧しい人々に施して与える風習で、聖書にも記述されています。この光景をバルビゾン村で初めて目にしたミレーは、感銘を受けてこの主題に取り組みました。本作品は、春夏秋冬の移り変わりを四つの農事として描いた連作の一つでもあります。

1857-60



「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼」油彩・板/53・5×71・0cm
群れを導く羊飼いの姿には、宗教的な象徴性も感じられる。家畜を農民から預かり、村を離れて過ごす牧人は、自然に精通する神秘的な存在としても見られた。

図版はすべて
山梨県立美術館蔵

1870



「グレヴィルの断崖」油彩・麻布/24.0×33.0cm

普仏戦争の戦火を避けて、港町シェルブールに滞在した際に描いた作品。静かにそこにある海のあるがままの表情が描かれている。

1865



「雁を見上げる羊飼いの少女」パステル紙/58・0×41・6cm(寄託作品)
ミレーは優れたパステル画の作品も制作している。編み物をする羊飼いの少女たちが冬の訪れを告げる雁の群れを見上げる姿が細やかな表現で描かれている。

美しい色彩と光で描く
人間の原風景。

四季連作への取り組みにもみられるように、ミレーは労働する人間をテーマにしたというよりは、自然と共にある人々の生活をテーマとした画家といえます。画業後半には風景画も多く制作していて、明るく、鮮やかな色彩を用いた繊細な表現が魅力的です。また、風景の中に小さく人々の姿が描かれていて、農民の姿を主役として展開した作品とのつながりも感じられます。ただ美しい景色としてではなく、人が生活をする環境として描かれているように感じられます。

ミレーは1875年にバルビゾン村でその生涯を閉じるまで描き続けました。ミレーが描く風景は人間の原風景ではないでしょうか。ふとした日常の気付きを積み重ねていくことで、一層ミレー作品の持つ深い魅力が心に染みてくるようになります。そして見たことがあるものに対して感じたり、考えたり、見ているものが何なのか考えるきっかけにもなる、ミレーの絵画とは、そういうものだと思います。



山梨県立美術館

小坂井 玲 学芸員



昭和52年、東京・銀座の飯田画廊にて、報道陣に初公開した《種をまく人》(夕暮れに羊を連れ帰る羊飼いの山梨日日新聞社提供)

山梨県立美術館と ミレー。

Teku-Teku
FEATURE

山梨県立美術館は
1978(昭和53)年11月3日に開館し
今年40周年を迎えました。
「ミレーの美術館」として親しまれ、
世界的にも有数のコレクションを誇る
美術館のこれまでの歩みを、
井澤英理子学芸幹が語ります。



開館当日の朝。徹夜で待つ人など、開館時間までには約400人が列をつつた



「自然に帰れ
ミレーと
農民画の伝統」
1998



「ミレー展」
1991



「ミレーとバルビゾン派」
1979



「生誕2000年
ミレー展」
2014



「バルビゾン派と日本」
1993



「ミレー展
ポストン美術館蔵」
1985

山梨県と「ミレー」の 運命的な出会い

「山梨県立美術館は山梨県の置県100周年を記念して計画されました。当初は総合博物館を開設予定でしたが、当時の田辺国男知事が『ほとんどの博物館はレプリカとパネル展示ばかりで、これではいけない。本物でいきたい』と、まずは美術館を」と考え、県農業試験場の跡地に建設しました。

開館にあたり、山梨の芸術家の作品以外にどのような作品を収蔵すべきかを検討する中で、初代館長・千澤慎治氏からバルビゾン派がよいのではないかとの提案がありました。日本の近代美術に関する作品はすでに収蔵している美術館があるので、西洋美術を集めることで差別化が図れること、また、自然の営みや農村風景などが山梨県と重なることから、バルビゾン派の作品を収蔵することに決定しました。そして、なんとそのタイミングで、ミレーの作品が売りに出る、しかも《種をまく人》という吉報が届いたので、ミレーの油彩作品自体は多くありません。で、欲しいといってもなかなか市場に出るものはありません。《種をまく人》ほどの傑作に巡り合い、山梨県が購入できたことは本当に幸運だったと思います」

「ミレーの美術館」となり得たわけ

「当館が最初に購入したミレー作品は《種をま

く人》と《夕暮れに羊を連れ帰る羊飼ひ》です。どの美術館でも目玉となる作品を買うことはありますが、当館の場合はこの2点で終わらすことなく、ミレーのさまざまな画業が紹介できるように、主題や制作時期を考慮し、《落ち穂拾い、夏》をはじめ肖像画、風景画など幅広いジャンルの作品を収集しました。現在、ミレーの作品は70点、そのうち油彩画が12点となりました。これは世界的にも大変多い数だと思っています。このように、地道に集め続けてきたことが『ミレーの美術館』といわれるゆえんだと思います。さらにバルビゾン派の価値や美術史的な位置をしっかりと示すためにルソー、ディアズ、トロワイヨン、デュプレなどのバルビゾン派の作品やクロード・ロラン、ライスダール、クールベなど西洋の風景画で欠かせない画家の作品もそろえました。

また、建物の改築、増築も進みました。通常、美術館はどのような作品にも合わせられるように白い壁が基調となりますが、ミレーとバルビゾン派に特化した「ミレー館」では第1室は赤色、第2室は緑色の壁とし、斬新でありながらも作品が映えるようにしています。さらに、収蔵庫も増築するなど目立たない部分もしっかりと充実させ、作品一つ一つを大切に保管しています。こうしたことは、文化の底上げにつながることであり、重要な取り組みであると思っています」



バルビゾンの庭に設置された「ミレーとルソーの記念碑」は、
フォンテヌブローの森に設置されているものと同じブロンズ型から鋳造



訪れた皆さまに寄り添える
美術館でありたい

「当館がある芸術の森公園には随所に彫刻が配置され、『バルビゾンの庭』にはミレーと親友ルソーの記念碑もあります。また、園内にはバラ園や日本庭園、ボタン園、さらに文学館もあります。四季折々の美しい自然が迎えてくれる公園の散策を楽しみながら、本物の芸術に出会い親しんでいただけます。」

開館から40年が経ち、この美術館と出会ったことで、人生を変えるようなことが何かあったらと思い、皆さまから美術館との関わりをつづつたエッセーを募集しました。開館当日に一列目に並んでいた方は『山梨の文化の夜明けだ』と感想を述べられました。《種をまく人》は、自分の気持ちと重ね合わせて見る方が多い作品で、ある人は、仕事などいろいろなことに迷っている時にこの絵を見て『自分はこのままでいい、ありのままでもいいんだ』と思ったそうです。絵画は見る



山梨県立美術館

甲府市貢川1丁目4-27 / TEL.055-228-3322



山梨県立美術館

井澤 英理子 学芸幹

時々でいろいろな思いを抱けるものですから、何度も繰り返し訪ねてほしいと思っています。開館40周年を記念して作った当館のキャッチコピー『種をまく世界がひろく』には、それぞれの世界が開いていくという思いが込められています。親に連れられて来た子が、友だちと来て、恋人と来て、結婚して子どもを連れて来て、いつか孫を連れて来る…。そんなふうには人生の節目節目に、かしまらずに来てもらい、その時の自分の気持ちなども反映させながら見ていただきたいと思っています。私たちもその時その時の皆さまに寄り添える美術館でありたいと考えています」



山梨県立美術館40周年記念 新収蔵作品

「角笛を吹く牛飼い」

(油彩・板／38.1×27.9cm)

一日の終わりを迎え、牧人が牛の群れを笛の音で呼び寄せています。この絵で特徴的なのは、やはり「彩り」。ミレーは気が見せる微妙な表情を鋭敏な感覚で捉え、夕焼けをピンク、オレンジ、そして紫、青といった色彩で表現しています。山梨県立美術館に収蔵されている他の油彩画と比較しても、この明るく鮮やかな色彩は特徴的なものです。

制作年は不詳とされていますが、1850年代中期以降は、明るく細やかな風景表現の作例が増えていること、また本作に関連するデッサン(1854～57年頃)の存在などから、1850年代後期の作品であろうと推測されています。この頃からミレーはそれまでの人物主体の表現から、風景表現に重きを置くようになり、人々を取り巻く一つ一つの自然の景観を非常に大切に描くようになって

いきます。そのようなことから、後年のミレーにつながる転換点の作例であるといわれています。

本作はミレーの死後、遺族(おそらく弟)が米国のコレクターに売り、1891年にミレーとも付き合いがあったボストンの法律家の手に渡りました。そして1908年にボストンで開催された展覧会に出品されて以降、広く一般の目に触れることはなかったと考えられています。そして今年、長い間専門家ですら情報を知り得なかった幻の名画が、山梨県立美術館に収蔵されたことで、実に約100年ぶりの一般公開となったのです。牛飼いが吹く角笛は、どんな音を響かせているのか…。そんな想像をしながら鑑賞するのも名画と触れ合う楽しみのひとつかもしれません。



ミレーの故郷でも親しまれてきた フランスの郷土料理「ガレット」を広めたい。

ガレット cafe すきまのじかん ルール ヴィッド | オーナー 倉津 あゆみ さん

小さい頃、クレープ屋さんになりたいという夢を抱いた倉津あゆみさんは、大人になってパティシエとして働いている時にフランス・ブルターニュ地方の郷土料理「ガレット」に出会いました。「山梨でもガレットを広めたい」。そう決意し、単身でフランスに渡り修業し、夢への歩みを着実に進め、3年前、甲府市内にガレット店をオープンしました。

本場で触れた「ガレット」に親しむ食文化

「日本で『ガレット』というと、おしゃれなイメージがありますが、フランスではブルターニュ地方の郷土料理として、山梨のほうとうと同じように身近な食べ物として親しまれています。ブルターニュ地方やミレーの故郷でもあるノルマンディー地方は土地が痩せていて小麦の成育には不向きなため、古くからソバが栽培され、そば粉を使う文化が根付いていたようです。日本では蕎麦そば、フランスではガレットになったんですね。山梨県立美術館にあるミレーの名画『種をまく人』で描かれているのが、ソバの種だという説があることを聞き、縁があるように感じて驚きました」

「ガレット」をもっと気軽に 楽しんでほしい

「帰国してから都内のガレット専門店で働きましたが、私は山梨が好きなので、自分のお店を出すなら山梨でと決めていました。どこにいても自然が近く、フランスの田舎にも通じるところがある山梨で、

店を持ちたかったんです。店の名前は、『すきまのじかん』というタイトルの時計と出会ったことがきっかけで付けました。その時計はフランスの絵本『L'heure vide(ルールヴィッド)』をもとに作られていることを作家さんに聞きました。絵本の雰囲気もすてきだったので店の名前にさせてもらって壁に時計を飾り、店そのイメージに合わせてつくりました。これからは皆さんに『ガレット』をもっと身近に、気軽に、おなかいっぱい食べていただいで、『ガレット』というフランスの郷土料理を山梨で広めていきたいと思っています」

ガレット cafe すきまのじかん L'heure vide

甲府市丸の内1-14-14
オリオンイースト通り
TEL.055-236-2414
営業時間：11:30～20:00(L.O19:00)
定休日：月曜日(祝日の場合は翌日)



「すきまのじかん」のイメージで作られた壁掛け時計



タマゴ・ハム・チーズが入った「コンプレットガレット」と、リンゴの発泡酒「シードル」



農業と自然の尊さを

絵画で伝える

農民画家(中央市)

志村 さとみさん

幼い頃から絵を描くことが好きだった志村さとみさんは、武蔵野美術大学に進学して油絵を専攻し、人物像を中心に描いていました。大学での学びの中で、将来は美術を通して社会貢献をしたいという思いを抱くようになっていったそうです。

「私は大学卒業後、1年2カ月の間、中国の大連に留学しました。中国を選んだのは中国の美術や漢字が好きだったからです。現地では、まず語学を学んでから、ファッションデザイナーの助手として、ショーでモデルが着る衣装に絵を描く仕事をしました。休日には、北京にある若い芸術家が集まるエリアに行ったり、美術館にも足を運んだりしました。そうした中で、中国画の伝統を生かしつつ、自分たちの新しい感性を入れ込んで作品を創作する人たちに触れ、私も水墨画のような日本の伝統美術の上に自分の表現をしていきたいと思うようになりました」

帰国後、Uターンし、ワイナリーに就職してからも、絵を描き続けていたという、さとみさん。描いたのはブド

— 山梨への移住相談はこちらへ — やまなし暮らし支援センター

専門相談員が常駐し、山梨への移住や就職について、ワンストップでお手伝い。移住セミナーや各種イベントも開催しています。

■市町村相談ウイーク

市町村の移住コンシェルジュ、移住担当者が、やまなし暮らし支援センターの窓口で皆さまのご相談に応じます。詳しくは、やまなし暮らし支援センターのHPで確認ください。

東京都千代田区有楽町2-10-1

東京交通会館8F NPOふるさと回帰支援センター内

TEL.03-6273-4306 FAX.03-6273-4307

E-mail:yamanashi@furusatokaiki.net

利用時間：火～日曜日 10:00～18:00

やまなし暮らし 検索



鉛筆で水墨画のような濃淡を描く、さとみさん。「水墨画は一色でありながら、さまざまな色が表されますが、私はそれを鉛筆で表現したいと思っています」と語ります



「為活而作（いきるためにつくる）」
（第77回山梨美術協会展 山梨美術協会賞受賞作品）



自宅の近くに借りたブドウ畑で

ウ畑で一生懸命働く祖母の姿。描くうちに見る人が農業に対して少しでも気持ちに向けてくれるような作品をつくり上げたいと思うようになっていったといいます。

「私はすべてのお年寄りを尊敬しています。現代つ子で苦労をしてこなかった私は、祖母からいろいろ話を聞くうちに、祖母のしわの一つ一つに意味があると感じるようになりました。さらに、しわは造形的にも美しいと私は思っています。

私の絵に影響を及ぼしている山梨の風土や自然環境は、フランス人画家ミレーが暮らしたバルビゾン村と似ていることもあり、自然とミレーを意識している部分はあるかもしれません。画風が似ているね、と言われることもありうれしく思います。

今は自分が描く農業の絵に、もつと思いを入れ込みたいと思い、ブドウ農家としても始動したところです。畑を借りて今年初めて苗を植え、3年後の収穫を目指しています。『美術と農業を結び付けた社会貢献』その明確な答えを見つけるのはまだ先になりそうですが、一歩ずつ堅実に歩んでいきたいと思っています」

06



ふみの池

文学館の東側に位置する日本庭園にある池。野鳥も多く飛来し、ハイドゥオチンクが楽しめる。ハナショウウブが咲き乱れる季節には風情豊かな散策に心が和む。

07



茶室 素心菴

日本庭園の奥にある。立礼席21畳、和室12畳、茶席4畳半があり有料で利用できる。また、お茶会や、落語などのイベントも開催され、憩いの場となっている。

08

芸術の小径
こみち

美術館の近くを流れる貢川沿いの土手は、桜並木の遊歩道として整備され、彫刻作品なども展示されている。竜王駅と美術館を結ぶ散策路としても楽しめる。

01

竜王駅



駅とその周辺は建築家・安藤忠雄氏の設計。駅舎内の通路はガラス張り。富士山や南アルプスなどの山々が望める。駅前から美術館へ向かうバスやタクシーもある。

02

イチヨウ並木



芸術の森公園の入り口付近ではイチヨウ並木が出迎えてくれる。春から夏は爽やかな緑色、秋が深まると黄金色に染まり、季節ごとに美しい表情を見せる。

03

バルビゾンの庭



木々に囲まれ心地よい庭。産業革命による工業化の波からバルビゾン村のフォンテーヌブローの森を守る活動をしたミレーとルソーの記念碑のレプリカがある。

04

ザ・ビッグアップル
NO.45

甲府市出身の作家い佐藤正明氏の作品。穴から情報が受信されているイメージで作られていて、日本や山梨の未来のシンボルになっしてほしいとの思いも込められている。

05

山梨県立文学館



樋口一葉や芥川龍之介、飯田蛇笏ら、山梨ゆかりの文豪の資料を展示している。また、広く文学に親しむイベントなども開催している。

てくてく
歩きの
途中で...

芸術の森公園で、美術館帰りのすてきなご夫妻に会いました。芸術が好きで各地の美術館や文学館を巡るのが趣味というお二人。「東京からミレーの新収蔵作品を見に来ました。色彩がとてきれいな絵ですね」(奥さま)「私は山梨出身ですから県立美術館はなじみ深いです」(ご主人)と穏やかな笑顔で話してくれました。

懐かしく、美しい、 人の心に宿る原風景。

緩やかな起伏のある大地、広がる空。

そこには自然の恵みを享受しながら生きる人間の日々の暮らしがある。

ミレーがその温かなまなざしで見つめ、描き出したものは、

誰もが心のどこかに思いを重ねることができ原風景。

ミレーが描く風景画と、山梨の風景は、どこか似ている気がする。

自然と人が共に生きる、そんな文化が根付いているからかもしれない。





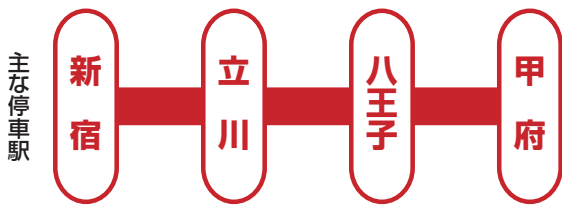
「ヴォージュ山中の牧場風景」1868年 パステル・紙／70.0×95.0cm(山梨県立美術館蔵)

ミレーが風景画を多く描き始めたのは1850年代末頃から。風景を主題として描く中で、刻一刻と変化していく自然の表情を表現する色調に重きが置かれるようになった。《ヴォージュ山中の牧場風景》は旅行先でのスケッチをもとにバルビゾン村のアトリエで制作されたものである。ミレーの晩年のパステル画を特徴づける豊かな色彩がここにも認められる。



山梨へは中央線の特急列車どうぞ!

便利で快適な特急「あずさ」・「スーパーあずさ」・「かいじ」



特急列車のご予約は「えきねっと」で!

えきねっと

会員登録
無料

詳しくはホームページをご覧ください。

えきねっと 検索

www.eki-net.com

- パソコン・スマホからラクラク簡単予約!
- 指定席が発売開始日のさらに1週間前から事前受付OK!
- 指定席券売機でスムーズにお受取り!

※一部の列車や一部の区間は「えきねっと」でお取り扱いしていません。
 ※乗車日の1ヶ月+1週間前から指定席を事前に申し込むことができます。実際の発売手配は乗車日1ヶ月前の午前10時からとなります。
 ※満席等の理由により、座席をご用意できない場合があります。※運転日や運転時刻、停車駅などは事前にご確認ください。
 ※掲載内容は2018年10月現在の情報です。ご利用の際はホームページなどで最新情報をご確認ください。※路線図や写真はイメージです。



山梨 **てくてく** *TokuToku*
VOL.13 | 2018 WINTER

平成30年11月1日[季刊]
第13巻冬号



やまなし森の印刷紙
この印刷紙には、
FSC®森林管理認証を
取得した山梨県有林からの
木材が使用されています。

山梨県

山梨県広聴広報課 発行 〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1
TEL. 055-223-1339 FAX. 055-223-1525 制作 山梨日日新聞社